

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	ヘルムホルツ氏逝く : 雑録
Author(s)	
Citation	龍南會雑誌, 31 : 46 - 50
Issue date	1894-11-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4470
Right	

からしめたり。彼は何事にまれ條例とあして發布する時は、之に説明書を附して其處分の理由を公にせり。之を聞く、彼の起草せる説明書類は政治經濟の考究に大なる價值あるものなりとぞ。當時の大臣マレンシエルフ曰く、

“He had the hand of Bacon and the heart of L'Hopital.”

道德の方面より之を云へば蓋し過言に非ざるあり。

彼は獨立の勉強と探究とを以て、早く既に社會學及經濟學に就て確定せる体系を保持し、朝に立ては撓まず屈せず僻論私見を排除して、其主義を實施せたりき。然れども若し弱點^①として之を擧ぐるを得ば、彼は余りに其主義に頑固ありき、彼は實際家として柔順寛容の精神を欠けり。

評に曰く、此人にして此弱點あり。知るべし學理には無二の忠僕なりしとを。

彼大臣となるや、唯だ國家の爲に國政整理を計り、改革の事業に従ひしに、惜哉、其事業に必要な惟一の事情を欠けり、即ち王の大臣として事業に従へるツルギーを信用して之を補助し、王權を以て反對派の攻撃を切り抜け、改革の實を擧ぐるに至らざりしを返すくも遺憾あれ。

ツルギーは改革の事業に着手して、遺憾にも之を成就するを得ざりき。然れども彼の計畫せる事業の久しからずして成功せるもの多きを知る。彼たる者亦以て地下に瞑すべきなり。

眞は彼は第十八世紀の產出せる人物中の偉大なる者にして、生涯唯佛國の爲に、眞理の爲に、其義務の爲に生活せり。

ヘルムホルツ氏逝く

ヘルムホルツ氏は獨逸國第一流の碩學にして、氏が生理學及び理學上なしたる研究は、實に學術進歩の新時期を爲せしこと云ふ。惜哉、氏は本年九月八日、病を以て遂に起たむ。在獨逸國大瀨先生は、本會の爲めに特に氏の略傳を寄送せられたれば、左に之を掲げ以て哀悼の意を表す。附て言ふ、此文の翻譯は湯原講師その勞を取られたり。茲に大瀨先生及び湯原講師の厚意を深謝す。

甲午十一月上浣

編者 識

科學界の一王侯、物理界の大侵略家、今時の最大研究家、獨乙國の姓名の飾りとも、名譽ともいふべきヘルムホルツ氏は、今や亡しぬ。昨夜は別に著しき故障もあらず経過せしが、今朝に至りて漸に衰弱の徵を呈し、正午近くに及びては、更に一層急劇ある衰弱の容態となり、終に午後二時四十五分に至りて、靜かに永眠に就けり。氏の發病は本年の六月ありしが、以來一度も全快の期あらず、數日前に至りて病再び重く、此再度の發病は本日に至り、終に氏をして不歸の人とならしめぬ。

諺に『殘されたる間隙は之を充たすに容易あらず』といへることあり。此諺は從來屢ば濫用せられたるも、氏の場合に限りては、之を文字通りに適用して切實なるを覺ゆ、氏は其の理想と研究の結果とを、數多の浩瀚ある著書に残しをきたるのこあらず、能く其の志を襲ぎ、熱心にして才能ある門人を、數多薰陶をけるも、氏自からの創制的才能は一旦欠けて終に之を補充するに由なし。氏は恰もデニボワレモンが生理學に於ける、ウエルチル、フツン、シーメンズが電氣學に於けるが如く、博物學に於ては實に補充すべからざるの偉人なりき。氏に比すべきものは氏自身の外他に其の人あらざるあり。實に近時の博物學者中一人として、氏が如くに斯學に規矩を與へ、時期を畫する程の影響を附與したるものはあらざるあり。總ての性質——人間の智識と其の進歩とに、新行路を開拓するに必要ある總ての性質は、悉く氏が一身に湊會せり。獨り湊會せるのみならず、此總ての性質は稀なる都合なき調和

をみせり。驚くべき非常なる發明の才、實驗上の妙技、鋭敏なる觀察、明白なる數理的計算、事實に根據する大膽なる總合力、及び深遠なる哲學的の見識、これらの諸性質を氏は實に能く縱横自在に驅使せり。吾人は氏に彼の死すべきものに——人間に——容易に許すべからざる賞賛の語を許さんと欲す。曰く『氏は迷ふこと稀ありき』。

氏が一生の事業は限りある紙面には悉く擧げて記し難けをば、茲に單に其の中の尤も顯著あることのみを掲ぐべし。氏は五官の生理學に哲學的の深き根底を與へ、自然の顯象は必ず器械的の法則に従ふといへることを尤も慥かに証明し、勢力保存論にも従前より一層大なる基礎を附與せり。氏は従前の學者がなしたるより一層多く、力學と數學とを電氣學、光學及び音學の上に應用し、これによりて此部分に驚くべき光明を投與せり。氏は物理學、生理學上の使用に供すべき多くの器械を發明し、此器械を以て多くの有益なる試験をなし、以て實驗的研究に新面目を開けり。氏は實に音色光に關しては獨創の識見を有する觀察者ありき。加之ならず、氏は又平易なる通俗の文章と、明亮なる興味ある講談とに長じたるが故に、能く普通人民中に理學の思想を傳布せり。神經の傳達力の速度を計算せたる先鞭者は氏にてありき。氏が視官の研究に於て得たる最も美しき結果は有名なる檢眼鏡の發明あり。

眼科學の科學的基礎を有するに至れるは、此發明に基くもの多し。氏は實に世の眼病者の恩人あり、されば此發明のみにて氏の姓名は不朽に垂るに足らん。

其の他生理的光學上の發明甚だ多く、心理的生理學の全体は大に其の材料を増加せり、特に氏が數理的哲學的の理會力は、氏をして能く事物の多くの關係に於て、尤も廣く見解をあたしめたり。

聽官學即ち音學も、其の今日の域に進みたるは、氏が光輝ある事業の功に歸するもの多し。氏は樂器の音色、詳にいへば例へば、同一の高さと強さとを有するピアノの音と笛の音とを區別する或物は、副音の共鳴によりて起るといふことを証明し、其の他氏が研究せし事項は、不調子の不快の感を惹起す原因、母音と子音との關係等の如き、甚だ多し。加之あらず電氣學、熱學又は解剖學までも、一とて氏の恩澤を被らざるものなし。特に近時生理學の基礎たる、神經纖維と神經節との關係は、實に氏の發顯に係るものあり。

ヘルムホルツ氏は天寶二年五月ボッツダムに生る、享年七十三歳あり。七十歳の誕生日は、學者は勿論官衙出版所の人々より、熱心に祝はれしとは世人の普く知る所あり。皇帝は手書して氏を樞密顧問官に任じ、閣下の稱號をも許せり。氏は初めボッツダムの中學に學び次ぎて伯林に遊びて醫學を修む、卒業の後伯林の慈惠病院の助手となり、後ボッツダム軍團騎兵隊附の軍醫となれり。此時氏は既に有益なる博物學上の論文を公にし、これによりて政府は氏を以て技藝學校の解剖學の教師となせり。後一年を経て氏はキヨニクスナブルグの病理學、生理學の員外教授となれり。幾もあらず天寶十二年僅か卅一歳にして、更めて同所の正員教授となれり。然れども其地の氣候氏の妻君の身体に適せざりしを以て、ボン教授に轉せり。氏はボンにて生理學研究所の設立に盡力せるも、其の功ありし爲めハイデルベルクに移り、茲に初て氏が素志貫徹せられて、所謂フリードリヒスバウと稱する研究所は設けられぬ。教授マグヌスの死後、ベルリンの哲學部は第一にキルヒホッフ氏を、第二にヘルムホルツ氏を以て其の後任に充てんと欲せり。當時デュボワレモン氏はベルリン大學の總理ありしが、千八百七十年にハイデルベルクに旅行し、キルヒホッフ氏はバイデンを去る能はざる事情あれば、ヘルムホルツ氏を伴

ふて伯林に歸り、物理學の正員教授とあせり。ヘルムホルツ氏は請ふて此地に物理學研究所を起し、氏自から之に長として非常の隆盛を極め、全十八年の間此に従事す。後シーメンスの設立に係る物理學工藝學研究所に移れり。

ヘルムホルツ氏は始めエルナ、フチン、フェルテンと婚せり。此女の家柄は、祖父某フリードリヒ大王の危急を身を以て護りたる功を以て、世襲貴族に列せられたるものあり。然るに不幸にして千八百五十九年に、此女は一男兒を遺して死せり。後妻として氏は有名なる國法學者ロベルト、フチン、モドル氏の女アンナ、フチン、モールを娶り、二男兒一女兒を生めり。女はシーメンスの男に嫁す。

氏は交際ふ於ては極めて質直、極めて謙遜あり。氏が大にして活潑ある青き眼と、高き額と、爽快なる音聲とは、氏に接する人に一種愉快なる刺激を與へ、覺へず仰慕の念を起さめたりと。

文苑

鰻魚說

聚遠閣主人

鰻魚。溪間之一小魚耳。而余未嘗見其狀焉。近者。山口生歸省而來。持一魚。藍以爲贈。余發而見之。潑然物躍。蹢然開口。余驚而欲仆。靜而觀之。則鰻魚也。其數三。長各七八寸。其大稱之。盤中游之。開鱗如扇。吮嚼生波。其快不可言。吁。余以鰻魚爲溪間之一小魚。而今其長大。有如此者。豈非鰻魚中之魁者乎。古人謂。千人之長。合千人之氣。萬人之長。合萬人之氣。人之才量。奚有大差。爲貴爲賤。唯其所遭。苟所在爲長。則人之尊榮。莫尙於此矣。談撤不云乎。